

[報告] 安政南海地震・津波の犠牲者五十回忌法要

—大阪市・大地震両川口津浪記石碑にて—

長尾 武*

The Memorial Service for Victims on the 50th Anniversary of the 1854 Ansei Nankai Earthquake Tsunami: At the Monument of “Ohjishin Ryokawaguchi Tsunamiki” in Osaka City

Takeshi NAGAO

Tennojicho minami 3-8-9, Abenoku, Osaka 545-0002, Japan

Japanese have often suffered from natural disasters. People who experienced disasters used to build monuments, on which they wrote lessons for future generations. However monuments and lessons might be forgotten as years go. We should find some good way to preserve them. I introduce a monument which has been well preserved in Osaka City. This monument is “Ohjishin Ryokawaguchi tsunamiki” which stands at the east end of Taisho bridge. It was constructed in 1855, one year after the Ansei Nankai earthquake tsunami. People in Osaka City built a monument in 5chome-Saiwaicho. It has been regularly maintained as a “Jizou (Ksitigarbha)” that keeps residents safe. In 1896, a large tsunami (Meiji Sanriku tsunami) hit Tohoku region, by which over 20,000 people were drowned. This large disaster shocked the whole country. Probably people in 5chome-Saiwaicho realized again the importance of the monument. Seven years after Meiji Sanriku tsunami, on Sep. 24 in 1903, people in 5chome-Saiwaicho held a memorial service on the 50th anniversary for victims caused by the Ansei Nankai earthquake tsunami.

Keywords: Ansei Nankai Earthquake, Tsunami, 50th Anniversary, Monument, Osaka.

§ 1. はじめに

自然災害の多い日本では、大きな災害後、犠牲者を弔い、教訓を刻んだ石碑が建てられてきた。災害からの復興は困難であるが、被災した人々は、後世の人々が同様の災難を避けるようにとの願いをこめて、石碑を建立するのである。しかしながら、一世代以上を過ぎると、忘れられてしまうことが多いのである。寺田(1933)は災害記念碑について、「はじめは人目に付きやすい処に立ててあるのが、道路改修、市区改正等の行われる度にあちらこちらと移されて、おしまいにはどこの山蔭の竹藪の中に埋もれないとも限らない」と述べ、石碑が年月の経過と共に忘れ去られることを危惧している。

先人の思いが後世によく伝えられるには、石碑の建立とともに、次世代に受け継がれるよう、何らかの方策が必要である。

大阪市には、地元住民によってよく守られている災害記念碑として、安政南海地震津波の碑「大地震両川口津浪記石碑」がある(写真1)。約40年前、筆

者が大阪市西区の中学校に勤務していた頃、毎日のように渡った大正橋の傍らにこの石碑があった。石碑は長年の風雨に耐えて、どっしりとした存在感は道行く人々の注意を引くものであった。石碑の文章「大地震両川口津浪記」は長文で難解であり、傍らにある解説文でようやく内容を知ることができた。しかし、当時は関西には大地震は起こらないといった誤った風潮があり、地震や津波防災への関心が薄かったといえる。2004年暮れ、インド洋大津波の様子がテレビの映像で映し出され、筆者は初めて津波の恐ろしさを実感し、研究を開始した。以来、10年、この石碑を何度も訪れ、地元の人々から教わり、論文にまとめてきた。まず、正確な碑文の判読、その教訓、建立された経緯について紹介した[長尾(2006, 2012)]。また、地元・幸町3丁目の人々が、この石碑を「お地藏さん」と呼んで、朝に夕にお世話されていることを紹介し、なぜ、そのように呼ばれるようになったかを、宝永地震のエピソードから考察した。ただし、普通のお地藏さんではなく、災害の

* 〒545-0002 大阪市阿倍野区天王寺町南3-8-9
電子メール: nagaotakeshi345@hotmail.com

供養碑として、また、市民に地震や津波の知識を伝える啓発活動にも役立てられてきたことについても述べた[長尾(2014)]. 本稿では、安政南海地震による犠牲者の五十回忌法要が地元有志によって盛大に行われたことについて紹介する。安政の地震から50年、災害の記憶も薄れた頃であったが、その7年前の1896年、明治三陸大津波がおこり、これが人々の記憶を呼び覚ましたと考えられる。



写真1 石碑の正面。

中央の線香立、左右の花立、石碑を囲む石板が1901年に設置された。2基の供養燈と玉垣は1974年に設置された。

Photo 1. The front of the monument.

§ 2. 「大地震両川口津浪記石碑」の建立と保全

2.1 石碑の建立と位置の移動について

「大地震両川口津浪記石碑」はJR大阪環状線大正駅の北東約300メートル、木津川に架かる大正橋の東詰(浪速区幸町)にある。大阪は江戸時代に二度の大地震とそれらに伴う津波(宝永四年<1707>・安政元年<1854>)に襲われ、大きな被害を受けた。死者の大部分は、地震の揺れを恐れ、小船に逃れた人々であった。地震の大きな揺れの後、津波が押し寄せて、安治川・木津川の両川口に碇泊していた大型の廻船を市中の堀川に押し上げ、橋を落とし、小船を押しつぶし、多くの人々が溺死したのであった。安政二年七月、大坂で最も被害が大きかった木津川口の渡し場(当時、橋は無かった)に供養石碑が建立された。石碑には、「大地震の時には津波が来ると心得、絶対に船に乗ってはならない。」など、当時の人々が被った苦い経験から導き出した教訓が記されている※[長尾(2006, 2012)].

この石碑は建立以来、大阪市域の交通網の整備

の影響を受け、三回も場所を移動させられたが、常に人々の往来の多い、目立つ場所に置かれてきた。最初は木津川の渡し場に建立されたが、大正四年(1915)に大正橋が架けられた際、橋の東詰に移転された。さらに昭和四九年(1974)、道路幅が拡張され、新大正橋に架け替えられた際にも、新しい橋の東詰に設置された。平成一六年(2004)の秋、阪神電鉄西大阪線の難波への延伸(阪神なんば線)に関連する工事が始まり、石碑や案内板は一時的に大正橋の東詰から北へ30mの人通りの少ない場所に移されたが、2006年春、工事が終了し、また元の大正橋の東詰に戻された[長尾(2006, 2012)].

※ 飯田(2014)はこの石碑に刻まれた「大地震両川口津浪記」の作者が京都大行寺信暁僧都であるとしている。

2.2 「お地蔵さん」としての石碑

「大地震両川口津浪記石碑」を地元・幸町の人々は「お地蔵さん」と呼び、日常にお世話されている。

わが国では、「お地蔵さん」は地域の安全を守る仏様として、地域の中心的な存在として位置付けられ、住民によって大切に守られてきた。この災害記念碑が今日まで大切に守られてきたのは、「お地蔵さん」としたことにあるのではないかと考えるのである。

地蔵盆には町内の人々が石碑に飾り付けを行い、お供えをして供養するのである。この時期に、石碑の文字がよく読めるように、墨入れも行われている。

供養石碑を「お地蔵さん」としてきたことについて、次のような事情がある。宝永地震後、犠牲者の菩提を弔うため、石地蔵が建立されたのであるが、安政の津波で失われ、その場所に、「大地震両川口津浪記石碑」が建立された。石地蔵は津波で流失した後、再建されることなく、供養石碑を町内の安全を守る「お地蔵さん」としたのであろう[長尾(2014)].

§ 3. 安政南海地震の五十回忌法要について

3.1 五十回忌法要について

「大地震両川口津浪記石碑」は幸町5丁目(現・幸町3丁目西)の「お地蔵さん」として守られてきた。しかし、普通の「お地蔵さん」ではなく、災害記念碑としての供養も行われてきたのである。その中でも、最も盛大に行われた安政南海地震による犠牲者の五十回忌法要を紹介する。現在も幸町にお住まいの増井健蔵氏宅に、五十回忌法要についての二つの史料、「大津浪五十念忌入費帳」(史料1)と「大津浪五十念忌寄附金人名簿」(史料2)が保存されている。これら

2史料と、それらの内容を要約した表を本稿の末尾に示した。

史料1によれば、法要が行われたのは明治三六年(1903)九月二四日(彼岸中日)、場所は「幸町渡し場北に入東側空地」であった。4ヶ寺^{※1}から僧侶等27名が来訪し、回向が行われた。支出内容については、寺院への御礼、買い物への支払いなど費用合計は約94円であった。同史料中、買物之仕拂部によれば、「一同 拾六円 幸町五丁目寄付者へ供物百四拾三軒」とあり、寄付した幸町5丁目有志143軒への供物を16円で購入したと記載している。この記述では幸町有志143軒が寄付金を出したということになる。この他に、11軒から津波記念碑飾付、7軒から供物があった。

史料1では寄付者143軒は幸町5丁目としている。しかし、史料2には143軒の寄付者の氏名、あるいは地域名が記されており、幸町5丁目だけでなく、周辺地域からも寄付や供物があったことがわかる。四円寄附した加茂仁八は小倉編(1934)によれば、幸町通4丁目^{※2}の居住であった。また、五十銭寄附した上ノ町若中の上ノ町は牧村(1968)によれば、旧難波村内の地区名であり、現・浪速区元町にあった^{※3}。供物については、勘助嶋仲間(現・大正区三軒家)と下之町若中の名前がある。下之町は牧村(1968)によれば、旧難波村内の地区名、下ノ町^{※4}ではないだろうか。以上から、幸町5丁目の住民以外に、周辺地域からも寄付金、供物があったことがわかる。

発起人は淡路清兵衛、増井卯兵衛、須賀忠四郎、田中菊次郎、畑田伊助の5名である(史料1)、淡路清兵衛は「大地震両川口津浪記石碑」建立時、大石の取り次ぎをした淡路屋喜右衛門の親族であろう。増井卯兵衛は会計を兼務した。帳簿の筆記は増井卯之助^{※5}(卯兵衛の子息)が担当した、須賀忠四郎は石碑建立当時、町年寄であった播磨屋忠四郎、本人あるいは、その子息かもしれない。

寄付金の最高額4円寄付した加茂仁八は安政六年現・秋田県生まれ、連合区会議員で幸町通4丁目に住み、日吉地区(幸町を含む地区)の教育会長として尽力した人であった。同じく4円寄付した岡本善助は文久三年生まれ、油商を営み、幸町通5丁目に住居し、連合区会議員であった。2円寄付した平野文助は現・奈良県生まれ、幸町通5丁目に住居し、木炭問屋を営み、明治31年に連合区会議員に初当選し、加茂氏の後、日吉教育会長を務めた。大正一二年

(1923)、関東大震災が起り、木造建造物の災害に対する脆弱さを痛感し、日吉小学校の鉄筋校舎建設に尽力したのであった。大正十四年(1925)、鉄筋3階建の校舎が竣工した^{※6}[小倉編(1934)]。

五十回忌の2年前に石碑の周囲の整備や修繕が行われたが、その詳細が増井氏所蔵「明治三四歳第八月 記念碑寄附人名簿」(史料3)、「明治参拾四歳第九月 記念碑修繕費用」(史料4)に記録されている。これら2史料と、それらの内容を要約した表を本稿の末尾に示した。

明治三四年(1901)八月、石碑の正面に線香立と花立一對、そして石碑の周囲を囲む石板が付け加えられた(写真1)^{※7}。一森清八、須賀忠四郎、須賀条三郎、増井卯兵衛の4名が線香立1基を寄付したが、線香立の下部に名前が刻まれている。但し、須賀条三郎の名前は無く、石碑建立時に地主であった須賀重蔵の名前が記されている(写真2)、加茂仁八、幸五若中が花立をそれぞれ1基ずつ寄付している。さらに、前記5名を含む幸町五丁目有志124名(他町の人も含まれている)が金44円85銭を寄附した^{※8}。

支出内容については、史料4に記載されている。石碑修繕費用、記念碑祭、僧への志、栗こし(菓子)などの費用であった。

災害を直接経験した人はほとんど存命でなく、他所から転入した人も多くなったと思われるが、石碑の改修、五十回忌の法要に多数の住民が寄付金を拠出したのであった。



写真2 石碑の線香立に4名の寄付者名が記載されている。

Photo 2. Four donors' names written on the pedestal of the incense.

※1 四ヶ寺とは以下の寺院である。寺院の所在地については井上(1922)を参照したが、現在地は大阪府(2014)で確認した。大谷派光徳寺 大阪市東区南久太郎町一丁目にあったが、現

住所は柏原市雁多尾畑1346であり、五十回忌法要の発起人

5名のうちの増井・須賀両家の菩提寺である。

知恩院派浄土宗宗圓寺 大阪市東区東寺町にあったが、現住所は天王寺区城南寺町8-14である。

法華宗本行寺 大阪市東区西高津中寺町にあったが、現在は単立宗教法人で、住所は中央区中寺1-1-57である。

真言宗龍山院堀内 位置について不明であるが、生玉神社の北に真言坂があり、真言宗の寺院が集中していたので、この付近ではないかと考えられる。

※2 幸町は、明治五年(1872)に町名変更で西大組第20区幸町通1~5丁目と改称され、明治一二年、西区に名称変更された〔西区史刊行委員会(1943)〕。昭和一八年(1943)幸町通は浪速区に編入され、昭和五五年(1980)幸町通1~5丁目は、幸町1~3丁目に変更された〔角川地名大辞典編纂委員会(1983)〕。

※3.4 牧村(1968)によれば、難波元町の地域は古くから市街地で、難波八丁と呼ばれ、八阪神社を中心に、弓場町、東ノ町、西ノ町、下ノ町、中ノ町、山ノ町、上ノ町、北ノ町と呼ばれていたと述べている。井上(1922)によれば、明治三三年(1900)に難波村が大阪市に編入された際、難波八丁の名称は廃止されたとしている。

※5 長尾(2014)では卯光としていたが、卯之助が正しい。訂正し、お詫びいたします。

※6 当初は木造による増築であったが、鉄筋校舎を新設する計画に急遽変更した。校舎建坪数693坪、経費総額(土地買収、内装なども含む)は約82万円、予定額を超過したが、同小学校を卒業し、海運業で成功した岸本兼太郎氏(西区西長堀南通2丁目に居住)による10万円の大口寄付をはじめ、部内外の篤志家604名から57,536円50銭の寄付が集まった。岡本善助は千円、増井卯光は百円を寄付した。校地はさきわめて軟弱地盤であったため、基礎工事には細心の注意が払われた。建築委員であった13氏(50回忌法要へ寄付した岡本、平野両氏を含む)は毎日3人ずつ交代で誠心誠意、厳重に監督した〔小倉編(1934)〕。昭和九年(1934)九月二日朝(8時頃)、室戸台風が襲い、大阪市では小学校244校中、176校で校舎が全壊・浸水・大破、児童269名が死亡、重軽傷も1873名に及んだ〔大阪市(1935)〕。日吉小学校に被害は無く、近隣の日吉幼稚園の園舎が倒壊した。園児の回想記によれば、寸前に日吉小学校へ避難して無事であった〔大阪市立日吉幼稚園創立百周年記念誌編集委員会編(1988)〕。

※7 浦田(1929)によれば、線香立と花立一對、周囲の石板は大正四年八月の修築とあるが、明治三四年にこれらが修築されたことが、増井氏所蔵「明治三四歳第八月 紀念碑寄附人名簿」に記録されている。

※8 史料3には、金44円85銭とあるが、筆者の計算では寄付金を合計すれば、47円85銭である(史料3に付属する表を参照)。

3.2 法要が行われた社会的背景

「大地震両川口津浪記石碑」は幸町5丁目の住民によって「お地藏さん」として守られてきたのであるが、建立以来、毎年地蔵盆に供養が行われてきた。しかし、大きな法要は営まれなかった。なぜ、五十回忌が盛大に行われたのかについて述べる。五十回忌のあった1903年の7年前、明治二九年(1896)に東北地方の三陸海岸を大津波が襲った(明治三陸大津波)。溺死者は2万人以上、村の全家屋が流失、一家全員が死亡というような事態も起こり、大惨事となった。復旧・復興は困難を極め、社会全体に防災意識が高まったと思われる。ラフカディオ・ハーンが安政南海地震津波に題材を採った「A Living God(生き神様)」を発売したのもこの頃である。大災害の報道を知って、幸町の人々は「大地震両川口津浪記石碑」に刻まれた教訓を改めて読み直し、大切に守っていかなければならないと思ったことであろう。

幸町5丁目が開催した五十回忌法要は、安政南海地震津波による幸町民の犠牲者のみならず、広く大坂市中とその近郊の犠牲者、及び、明治三陸津波の犠牲者を慰霊する法要でもあったと考えられる。他所で起こった大惨事から津波災害の恐ろしさと「大地震両川口津浪記石碑」の教訓を再認識し、このように盛大な五十回忌法要を営んだのであろう。

§4. おわりに

大阪は近代以後、市街地の発展、交通網の整備などで大きく変貌したが、「大地震両川口津浪記石碑」は幸町5丁目(現・幸町3丁目西)の住民によって、「お地藏さん」として大切に守られてきた。

安政南海地震の五十回忌法要が盛大に行われた理由は、その7年前、1896年に起こった明治三陸大津波の影響が大きいと考えられる。この災害は日本全体に大きな衝撃を与え、特に幸町5丁目の人々は「大地震両川口津浪記」の教訓の大切さを再認識したと思われる。しかし、五十回忌法要への参加者は幸町5丁目と周辺地域に限られ、市民に広く知られることは無かった。

震災経験者の多くは亡くなり、他所からの移住者も増えたが、この法要以後も、「大地震両川口津浪記石碑」は大切に守られてきた。交通網の整備の影響から、三回も場所を移動させられたが、常に人々の往来の多い目立つ場所に置かれてきた。また、住民の手によって、碑文を解説した案内板を設置した。さらに、『大地震両川口津浪記・記念誌』を発刊し、防

災についての啓発活動も行ってきた[宮原・愛知編(2007)].

住民による地道な活動の積み重ねによって、平成一九年(2007)、「大地震両川口津浪記石碑」は大阪市指定有形文化財に指定された。特に、東日本大震災以後、大阪市のみならず、全国的にも、いっそう注目されるようになってきた。石碑の墨入れに高校生が参加することもあった。

「大地震両川口津浪記石碑」を幸町5丁目(現・3丁目西)の住民だけでなく、大阪市民で守り、防災教育に役立てる動きが起こってきている。これらの動きが一過性のものでなく、今後さらに充実し、発展することを願っている。

謝辞

「大地震両川口津浪記石碑」を「お地蔵さん」として守ってこられた幸町3丁目西(旧幸町5丁目)の住民の皆様には大変お世話になりました。調査を始めて以来、愛知喜久雄氏、山本善三郎氏、安岡廣氏にはたいへんお世話になりました。特に、増井健蔵氏には史料の閲覧をさせていただき、また、ご教示を賜りました。この報告ができるのも、ご先祖様からの申し送りを大切に守ってこられた増井様のお蔭と感謝しております。本稿では、地元の功労があった方々をご紹介しましたが、十分に果たせなかったことをお詫びします。英文Abstractについて、Erika Luley氏から援助を賜りました。編集を担当して下さった金田平太郎氏から適切な修正意見を賜りました。ここにお世話になりました皆様に厚く御礼申し上げます。

対象地震：1854年安政南海地震

文献

- 角川地名大辞典編纂委員会, 1983, 角川地名大辞典, 27 大阪府, 角川書店, 1798pp.
- 飯田直樹, 2014, 近代大阪人の災害意識と地震時における避難行動—「近代大阪の地震」展を開催して—, 京都歴史災害研究, 15, 1-10.
- 井上正雄, 1922, 大阪府全志, 2 (清文堂出版, 1975, 復刻, 1212pp.)
- 牧村史陽, 1968, 難波について, なんば, 2, 難波史談会, 34-36.
- 宮原健・愛知喜久雄編, 2007, 「大地震両川口津浪

記」記念誌, 大阪市浪速区幸町3丁目西振興町会・大地震両川口津浪記念碑保存運営委員会, (第3版2011年, 56pp) .

- 長尾武, 2006, 水都大坂を襲った津波 (2012改定, 水都大阪を襲った津波, 自家版, 528pp.)
- 長尾武, 2012, 大地震両川口津浪記に見る大阪の津波とその教訓, 京都歴史災害研究, 13, 17-26.
- 長尾武, 2014, 大阪市における南海地震石碑と教訓の継承, 立命館大学歴史都市防災論文集, Vol.8, 263-270.
- 西区史刊行委員会, 1943, 西区史, 1, (復刻版, 清文堂出版, 1979, 906pp.)
- 小倉正巳編, 1934, 日吉六十年誌, 大阪市日吉教化委員会, 466pp.
- 大阪府, 2014, 大阪府宗教法人名簿 (<http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/14/00000000/syuukyuhoujinmeibo.pdf>).
- 大阪市, 1935, 大阪市風水害誌, 大阪市, 1226pp.
- 大阪市立日吉幼稚園創立百周年記念誌編集委員会編, 1988, 大阪市立日吉幼稚園創立百周年記念誌, 大阪市立日吉幼稚園創立百周年記念誌編集委員会, 35pp.
- 寺田寅彦, 1933, 津浪と人間 (寺田寅彦全集, 7, 岩波書店, 1997, 403pp.)
- 浦田利郎, 1929, 南北堀江誌, 南北堀江誌刊行会, 838pp.

史料

史料1「大津浪五十念忌入費帳」

(表紙)

場所幸町渡し場北へ入東側空地
明治三拾六年第九月廿四日執行
大津浪五十念忌入費帳

幸町五丁目有志者

(本文)

御礼之部

大谷派光徳寺

- | | |
|----------|------------|
| 一金 壹円 | 回向料 |
| 一同 五拾銭 | 供養料 |
| 一同 貳拾銭 | 寺車賃 |
| 一同 参円六拾銭 | 役僧貳人 回向供養料 |
| 一同 壹円五拾銭 | 本役僧三人 |

〆金 六円八拾錢
 知恩院派浄土宗宗圓寺
 一金 壹円 回向料
 一同 五拾錢 供養料
 一同 貳拾錢 寺車賃
 一同 五円四拾錢 回向供養料 寺車賃六人
 一同 壹円貳拾錢 役僧四人 回向供養料
 一同 参拾錢 小僧壹人
 一同 参拾錢 寺男志一人

〆金 八円九拾錢
 法華宗本行寺
 一金 壹円 回向料
 一同 五拾錢 供養料
 一同 参円 役僧六人 回向供養料
 一同 参拾錢 小僧壹人 同供養料
 一同 参拾錢 拾錢 寺男志一人

〆金 五円拾錢
 真言宗龍山院堀内
 一金 壹円 回向料
 一同 五拾錢 供養料
 一同 参円 役僧六人 回向供養料
 一同 参拾錢 小僧壹人 同供養料
 一同 参拾錢 寺男志一人
 一同 五拾錢 塔場御礼

〆金 五円六拾錢

〆金 貳拾六円四拾錢

買物之仕拂部

一金 拾六錢 蠟燭大二丁
 一同 三錢 八百や
 一同 五錢 渡し賃
 一同 三十錢 薰香半斤
 一同 貳錢 元結代
 一同 八拾四錢 葡萄釣竹代
 一同 拾九錢五厘 釘代
 一同 六拾錢 縄代
 一金 貳円拾錢 供物菓子代
 一同 壹円廿五錢 供養餅代
 一同 貳円廿五錢 木綿三疋
 一同 拾八錢 長尾 木引代
 一同 壹円四錢 蠟燭代
 一同 壹円八拾四錢 焚薪四掛
 一同 四円六拾四錢 塔場材木十三本
 一同 貳円拾錢 大工三人

一金 三拾錢 三寸角一本
 一同 拾錢 警察書記料
 一同 八円廿四錢 蠟燭代 田中屋渡
 一同 貳拾錢 濱口丸太 借用賃
 一同 七拾錢 疊損料
 一同 拾錢 小割竹
 一同 卅五錢 光徳寺行車賃
 一同 壹円 濱口丸太 借用賃礼
 一同 拾錢 警察書記
 一金 壹円五拾錢 畑山手伝三人
 一同 貳拾錢 飴付板 借り賃
 一同 三拾錢 曲録 返却車賃
 一同 九拾五錢 経木臺板 壹束
 一同 四拾貳錢 宗圓寺行 三人 車ちん
 一同 五拾貳錢 同行 四人 車賃
 一同 六拾錢 縄代
 一同 壹円拾錢 経木代
 一同 三拾錢 宗圓寺 一人 車賃
 一金 壹円 熊勘手伝 二人
 一同 拾六円 幸町五丁目寄付者へ供物
 百四拾三軒 外=拾七軒
 一同 三拾九錢 野田松 紙代
 一同 四拾五錢 菊楼菓子 附加供物代
 大黒や渡
 一同 壹円 長尾亀之本寺行 車賃
 一金 八拾四錢 大経木代
 一同 貳円廿錢 山中金 石工手間代
 一同 貳拾錢 経木買 車賃
 一同 五錢 野田松 紙代
 一同 拾五錢 供物 餅代
 〆金 五拾六円八拾五錢五厘

御礼之部

一金 五拾錢 御券壹枚 地主濱恒行
 一金 五拾錢 木内組 御券壹枚
 一金 五拾錢 長尾亀へ 御券一
 一金 五拾錢 熊勘へ 御券一
 一金 壹円 吉村善へ 御券二
 一金 貳円 淡路清へ 金封
 一金 貳円 岡若中 御礼
 一金 貳円 上荷中
 一金 貳円 大工濱
 〆金 拾壹円

合計 〆金 九拾四円五拾五錢

筆者 増井卯之助 印
 発起人 発起人 淡路清兵衛
 兼会計係 増井卯兵衛
 発起人 須賀忠四郎
 兼検査係 田中菊次郎
 兼検査係 畑田伊助

<史料1に記載された支出の要約>

支出の項目	金額
寺院への御礼	26円40銭
買物の支払い	56円85銭5厘
御礼	11円
合計	94円25銭5厘※

※史料1では、94円55銭であるが、筆者の計算では、94円25銭5厘である。

史料2 「大津浪五十念忌寄附金人名簿」

(表紙)

明治三十六年第九月廿四日彼岸中日

大津浪五十念忌寄附金人名簿

幸町通五丁目 有志者

(本文)

寄附之部

一金 四円 須賀忠四郎

改金貳円五十銭

一金 三円五十銭 増井卯兵衛

改金貳円五十銭

一金 三円 田中菊次郎

改金貳円五十銭

一金 壹円 畑田伊助

一金 四円 加茂仁八

一金 四円 岡本善助

一金 参円 一森清八

一金 参円 白井源助

一金 貳円 平野文助

一金 貳円 野田宗松

一金 貳円 熊勘事 矢野律三

一金 貳円 木内組若中

一金 壹円五十銭 張勝五郎

(以下、氏名を省略する.)

一金 壹円 25人

一金 八拾銭 5人

一金 六拾銭 1人

一金 五拾銭 31人(上ノ町若中など)

一金 参拾銭 16人

一金貳拾五銭 1人

一金貳拾銭 37人

一金拾五銭 5人

一同拾銭 7人

一金五銭 2人

一金四円五十銭参銭六厘 経木書 志
 賽銭

合計 金九拾三円三銭六厘

善ノ綱売却

一金壹円五十銭 須賀忠四郎

増井卯兵衛

畑田伊助

淡路清兵衛

田中菊次郎

合計 金九拾四円五十銭三銭六厘

一津浪記念碑前鋳付寄附

堀辰雄

淡路嘉市郎

友田馬吉

大賀和八

松永市太郎

丸市

牧山米三郎

兵道熊太郎

田中亀之助

中尾トラ

越田清兵衛

金拾一軒

帳外供物 送りシ文

淡路清兵衛

西川勘四郎

丸長

濱恒

下之町若中

勘助嶋仲間

<史料2に記載された寄付の要約>

寄付金額	人数※1	人数×金額
4円	2人	8円
3円	2人	6円
2円50銭	3人	7円50銭
2円	4人	8円
1円50銭	1人	1円50銭
1円	26人	26円
80銭	5人	4円
60銭	1人	60銭
50銭	31人	15円50銭
30銭	16人	4円80銭
25銭	1人	25銭
20銭	37人	7円40銭
15銭	5人	75銭
10銭	7人	70銭
5銭	2人	10銭
計	143人	91円10銭
経木書志 賽銭		4円53銭6厘
計		95円63銭6厘※2
善ノ綱売却代〈発起人5人〉		1円50銭
総計		97円13銭6厘※3
津波記念碑前鋳付寄附11人		記載無
供物	6人※4	記載無

※1 史料2では、寄付者の姓名が記載されている。しかし、上ノ町若中という記載もある。本表ではこれも1人とした。

※2 史料2では93円3銭6厘であるが、筆者の計算では95円63銭6厘である。

※3 史料2では94円53銭6厘であるが、筆者の計算では97円13銭6厘である。

※4 史料2では、勘助嶋仲間、下之町若中の記載があるが、それぞれ1人とした。

史料3「明治三四歳第八月 記念碑寄附人名簿」

(表紙)

明治卅四歳第八月
記念碑寄附人名簿

幸五有志者

(本文)

一線香建	一森 清八
	須賀 忠四郎
	須賀 条三郎
	増井 卯兵衛
一花建	加茂 仁八

幸五若中

一金壹円五拾銭	須賀忠四郎, 一森清八, 増井卯兵衛, 岡本善助, ろ勝, 伏田鉄工場.
一同壹円	須賀条三郎, 相模久次郎, 田中久兵衛, 栗山栄吉,
一金五拾銭	加茂仁八, 鳥音, 福嶋, 福田駒次郎, 今濱篤蔵, 野村萬次郎, 山内代吉, 張勝五郎, 井上富太郎, 大賀和八郎, 長尾亀蔵, 真嶋豊蔵, 淡路嘉一, 上ノ若中, 小西伊兵衛, 平野文助.
一金参拾銭	以下, 氏名を省略 38人
一金式拾五銭	2人
一金式拾銭	39人
一金拾五銭	2人
一金拾銭	12人
一金五銭	3人
一金五拾銭	井上松太郎※
一金五円	八木與三郎※
合計	金四拾四円八拾五銭

※ 50銭寄附の井上松太郎と5円寄附の八木與三郎が末尾に記載されている。

<史料3に記載された寄付の要約>

寄付	人数	
線香立	4人	
花立 2基	2人	
寄付金	人数	金額×人数
5円	1人	5円
1円50銭	6人	9円
1円	4人	4円
50銭	17人	8円50銭
30銭	38人	11円40銭
25銭	2人	50銭
20銭	39人	7円80銭
15銭	2人	30銭
10銭	12人	1円20銭
5銭	3人	15銭
合計	124人	47円85銭※

※史料3では寄付金合計44円85銭であるが、筆者の計算では47円85銭である。

史料4 「明治参拾四歳 第九月 紀念碑修繕費用」

(表紙)

明治参拾四歳第九月

紀念碑修繕費用

幸五有志者

(本文)

明治参拾四歳第九月

一金 拾貳円参拾錢	石利
一同 参円貳拾錢	石金
一同 壹円貳拾錢	土方
一同 壹円五拾六錢	土原
一同 壹円参拾錢	手伝三人亀
一同 五円貳拾錢	粟こし供養
一同 壹円五拾錢	板石工賃錢
一金 七拾錢	板石代
一同 六拾参錢	工人賃
一同 貳円	紀念碑祭入用
一同 六拾錢	僧二人志
一同 八拾六錢	人名簿書記
一同 七拾参錢	車賃
一同 貳拾錢	車志
一金 八拾錢	いろいろ
一同 五錢	罫紙

ノ金 参拾参円六拾参錢

寄付金ノ四拾四円八拾五錢

紀念碑入用金ノ参拾参円六拾参錢

差引残金ノ拾壹円貳拾貳錢

花建壹本 若中引 貳円八拾錢 出

惣計残金 八円四拾貳錢

参拾四歳第九月十三日

<史料4に記載された支出の要約>

支出内容	金額
石利	12円30銭
石金	3円20銭
土方	1円20銭
土原	1円56銭
手伝三人亀	1円30銭
粟こし供養	5円20銭
板石工賃錢	1円50銭
板石代	70銭
工人賃	63銭
紀念碑祭入用	2円
僧二人志	60銭
人名簿書記	86銭
車賃	73銭
同志	20銭
同御礼	80銭
いろいろ	80銭
罫紙	5銭
合計	33円63銭
寄付金	47円85銭※1
紀念碑入用金	33円63銭
差引残金	14円22銭※2
花建壹本 若中引	2円80銭 出
惣計残金	11円42銭※3

※1 史料4では寄付金合計44円85銭であるが、筆者の計算では47円85銭である。

※2 史料4では差引残金11円22銭であるが、筆者の計算では14円22銭である。

※3 史料4では、惣計残金8円42銭であるが、筆者の計算では11円42銭である。

